

空間論から見たカント批判哲学への道

犬竹正幸

A Road to Kant's Critical Philosophy from the Viewpoint of his Theory of Space

Masayuki INUTAKE

要 旨

カントは30年以上にわたる哲学的思索の末に、批判哲学を樹立するに至ったが、この批判哲学へと向かう思索の歩みの途上において決定的な役割を果たしたものは、カントの空間論（の変遷）であったと思われる。カントはその哲学活動の開始以来、自然哲学と形而上学との関係というテーマ、より正確には、ニュートン力学に代表される近代自然科学の形而上学的基礎づけというテーマを自己の主要な哲学的課題の一つとしていた。カントは初期には、この問題をライプニッツやヴォルフの形而上学のうちに受け継がれている伝統的な形而上学の枠組の下で考えていたが、ニュートン力学の理解が深まり、とりわけ、その基礎に絶対空間という形而上学的前提がおかれるべき必然性を理解するにつれて、空間の関係説を内包する伝統的形而上学に対する深刻な疑念が生じてきた。そして68年の『方位論文』における絶対空間の存在論証を経て、69年には、空間・時間をわれわれの感性的直観の形式として捉える空間・時間の超越論的観念性の理論へと至ったと思われる。その成果が70年の『就任論文』であったが、そこに展開された形而上学は、批判哲学への扉を開いただけの過渡期の形而上学であり、批判哲学の完成には、なお10年余にわたる茨の道を歩む必要があった。

キーワード：批判哲学、『方位論文』、絶対空間、空間の関係説、ニュートン力学

はじめに

成熟期カントの哲学は批判哲学と呼ばれる。それが確立されたのは通常、1781年に公刊された『純粋理性批判』（以下、『批判』と略記）第一版によってであるとされ、その前後におけるカントの哲学活動を二分して前批判期と批判期とに分けるのが大方の見方である。私もこうした見方に基本的に同意する。ただし、1770年に公刊された教授就任論文『感性界と知性界における形式と原理』（以下、『就任論文』と表記）をどちらの時期に含めるかについては、諸家のあいだに完全な意見の一致は見られていない。この問題については以下のように考えたい。批判哲学の成立を1781年という一点におい

て捉えるのではなく、少し幅をもたせて捉えるべきである。なぜかという、カントの批判哲学が、空間・時間の超越論的観念性の理論（空間・時間をわれわれの感性的直観の形式と捉える理論）と、対象構成の理論（経験の対象を、われわれの悟性のはたらきによって構成されたものと捉える理論）とを二本の柱として成立していることに異議はないと思われるが、このうち、前者の理論はたしかに70年の『就任論文』で提示されているのに対し、後者の理論は『批判』のうちではじめて登場するからである。それゆえ、70年の『就任論文』において批判哲学への扉がはじめて開かれ、ほぼ10年間にわたる「沈黙の歳月」⁽¹⁾を経て、81年の『批判』に至ってカントの批判哲学が確立されたと見てよいであろう。

さて、本論考で問題にしたいのは、カントはどのようにして批判哲学への扉を開いたのか、その経緯についてである。この問題を本格的に論じた欧米の研究は枚挙にいとまがないのに対し⁽²⁾、我が国の研究は意外に少ない。高橋昭二の『カントの弁証論』中の第二章「カント批判期前の哲学」、あるいは濱田義文『若きカントの思想形成』がよく知られている程度である⁽³⁾。ただ欧米の研究にせよ我が国の研究にせよ、前批判期から批判期への移行プロセスを追跡するにさいして、前批判期のほとんどすべての著作・論文の内容を執筆年代に沿って網羅的に紹介し、そこに見られるさまざまな要素が統合されて批判哲学が形成されるに至ったとする論調が大半を占めている。このような論じ方を誤りであると主張するつもりはない。ただ、このようなやり方では、カントが30年を超える哲学的営為の果てに、なにゆえ批判哲学へと向かうに至ったのか、その必然性が見えてこないのである。前批判期におけるカントの哲学活動の主要なテーマが、その著作・論文の数と量から推測されるように、自然哲学および、それと形而上学との関係にあったことはまちがいない。上記の諸家の多くの研究も、この点に着目して、カントの自然哲学および形而上学、さらには両者の関係についての論考に多くのページを費やしている。だが、その自然哲学および形而上学の中でも、特にどのようなテーマが批判哲学の形成に強い関わりをもつのか、という問いに対して明確な解答を提示している研究に出会うことは稀である⁽⁴⁾。

私は前批判期においてカントが取り組んだ自然哲学的ないし形而上学的なテーマのうち、彼の空間論こそが、批判哲学の成立へと至る道程を理解する上で、もっとも重要なものであると考える。彼の空間論は、49年に公刊された処女作『活力の真の測定に関する考察』（以下、『活力測定考』と略記）をはじめとして、55年の『形而上学的認識の第一原理の新解明』（以下、『新解明』と略記）、56年の『自然モナド論』、58年の『運動と静止の新理論』（以下、『運動と静止』と略記）といった諸著作のうちに見いだされるが、何ととっても重要であるのは、68年に公刊された『空間における方位の区別の第一根拠について』（以下、『方位論文』と略記）である。詳しい論証は本文に譲る

が、アカデミー版のページ数でわずか7ページという、きわめて短いこの小論文こそが、批判哲学への道を明確に示す決定的な道標ないしターニングポイントであると考えられるのである。

さて、上述したように、前批判期におけるカントの主要なテーマは、自然哲学と形而上学との関係をどう考えるか、というものであった。この観点から見たとき、前批判期におけるカントの自然哲学の内容およびその変遷が、つねに形而上学のそれと連動していることが判明する。56年の『自然モノ論』は55年の『新解明』と対応し、63年の『負量の概念を哲学に導入する試み』（以下、『負量の概念』と略記）は64年の『自然神学と道徳の原則の判明性』（以下、『判明性論文』と略記）と対応しており、さらに68年の『方位論文』は70年の『就任論文』と連動している。そこで、空間論から見たカント批判哲学の成立史をテーマとする本論考では、自然哲学と形而上学とのこうした対応ないし連動の内容およびその変遷を、時代順に三つの時期に分けて順次、検討することを通じて、批判哲学の成立プロセスにおいてカントの空間論が決定的に重要な役割を担っていたことを明らかにして行きたい。それゆえ本論考は70年の『就任論文』までを考察対象とし、『批判』については折に触れて言及するにとどめる⁽⁵⁾。しかし、その前に準備作業として、若きカントの思想形成にさいして直接、間接に影響を及ぼしたと見られる、当時のヨーロッパ哲学界の状況を、自然哲学と形而上学との関係という点に絞って簡潔に見ておこう。

第一章 若きカントを取り巻くヨーロッパ哲学界の状況

当時、「自然哲学」という語は現代ならば、ほぼ自然科学という名で呼ばれる学問領域を指示していた。とりわけ17世紀は、数学の適用にもとづく近代自然科学の創成期にあたり、それが新たな自然哲学の成立を意味するものであったことは、1686年に公刊されたニュートンの主著の表題『自然哲学の数学的諸原理』（以下、『プリンキピア』と表記）のうちに象徴的に示されている。ところが、まさしくこの『プリンキピア』のうちでニュートンは、「事物の現象するところより神に及ぶのは、まさしく自然哲学に属することである」⁽⁶⁾と語って、自然哲学が、経験的な自然研究から神学ないし形而上学までも含んだ広範な内容をもった学問であることを明言している。具体的には、ニュートンの運動の三法則が成立する場として「絶対空間」の存在が要請され、さらに、この絶対空間が「神の感覚器官」⁽⁷⁾とみなされることによって、その神学的ないし形而上学的な基礎づけが与えられる、といった例を挙げることができる。このようにニュートンにあって自然哲学は、その基礎・土台に超経験的な学問である神学ないし形而上学がおかれ、その上に経験的な学問としての自然科学が位置するという構造をもった、広範な

内容を含むべき学問であった。したがって、自然哲学という語が主に自然科学という意味で用いられるにしても、その場合の自然哲学が、その根底に形而上学的な原理・基礎を有すべきことが、つねに意識されていたわけである。その点はニュートンに限らず、彼に先立つデカルトについても、同様に見てとることができる。デカルトは1644年の『哲学原理』の中で、自然界において運動量の保存則が成り立つ根拠として、神の完全性を持ち出しているが⁽⁸⁾、これもまた形而上学による自然哲学の基礎づけの例として理解することができるであろう。さらに、若きカントの思想形成にきわめて大きな影響力を及ぼした、ライプニッツおよびヴォルフの形而上学もまた、自然科学ないし自然哲学の形而上学的な基礎づけというテーマを、その重要な部分として含んでいるが、そのさい、直接に神学的根拠を持ち出すのではなく、一般形而上学ないし存在論のうちに自然哲学を可能にする根拠・原理を見いだそうとする、そのかぎりでは合理的な思想傾向を有しており、この点がニュートンやデカルトとは決定的に異なっている。しかし、その詳細については、次章以下で明らかにしたい。

さて、上述したようにニュートンは自然科学の根底に形而上学が存すべきことを認める一方で、『プリンキピア』の中で、自然哲学ないし自然科学的方法的原理として、いわゆる数学的実証主義を提唱している。すなわち『プリンキピア』では「力の数学的概念」(河辺訳、前掲書、64頁)だけを問題としており、「力の物理的な原因や所在を考察しているわけではない」(同上)と語り、さらに「私は仮説を捏造しない」(同上書、564頁)と主張して、『プリンキピア』の中では力、とりわけ重力の本質に関する形而上学的な考察には関与しないという態度を鮮明に打ち出している。これに対しては『プリンキピア』公刊直後から、絶対空間や遠隔作用としての重力といった概念は形而上学的概念そのものであり、しかも形而上学的に見て理解しがたい不合理を含んでいるという、デカルト派やライプニッツによる批判が現れた。その詳細はしばらく措くが、ここではこの問題をめぐるニュートンとデカルト派・ライプニッツとの対立の根本的な所在がどこに在るのか、という点についてだけ述べておきたい。

デカルト派とライプニッツに共通する思考の枠組みによれば、自然哲学的認識においては、それが対象とする事物の本性・本質を、まず第一に形而上学的考察によって把握し、そうした形而上学的な基礎の上に、当該の事物の振舞いや現象に関する法則的認識が可能となると考えられていた。物体即延長の形而上学的テーゼを基礎とするデカルトの『哲学原理』や、物体の本質には延長に先立って固有の力が内在するという動力学的な原理を出発点におくライプニッツの『動力学試論』(1695年)は、こうした思考法の典型的な産物である⁽⁹⁾。これに対してニュートンが『プリンキピア』で表明している公式的見解によれば、事物の本質についてのそうした形而上学的な考察を棚上げにしたままで、事物の振舞いや現象に関する数学的法則を確立することは十分可能であるとされ

る。このような思考態度は直接には、ニュートン自身が論証した重力の数学的法則に対する、重力の本性に関する形而上学的考察にもとづく反論をあらかじめ封じることを目的としたものであって、ニュートン自身は、自然哲学全体から形而上学を排除する意図をもっていただけではなかった（この点は先述した通りである）。だが、自然哲学における方法上の原理としてのこうした実証主義の思想は、18世紀に入るとダランベールを中心とした、啓蒙主義の洗礼を受けた自然研究者たちによって全面的に採用されるに至り、自然哲学からの形而上学の排除という思想傾向が自然研究者のあいだに共有されるようになって行ったのである。

以上のようなヨーロッパ哲学界の状況の中で自らの哲学思想の形成に努めていた若きカントは、一方でニュートンの自然哲学に傾倒し、他方で基本的にライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学の枠組の下で、ニュートンに代表される近代の数学的自然科学の形而上学的な基礎づけがいかにして可能となるかを模索していた。それがどのような内容であったか、またどのような結果となったかについて、次章以下で見て行こう。

第二章 初期カントにおける自然哲学と形而上学との関係

上述したように、若きカントは一方でニュートン自然哲学に傾倒しつつ、他方でライプニッツ・ヴォルフ形而上学の枠組の下でニュートン自然哲学の基礎づけを模索していた。しかし、この問題への取り組みが相当な困難に直面するであろうことは容易に想像がつく。その理由は以下の通りである。『ライプニッツとクラークとの往復書簡』から読み取ることができるように、ライプニッツとニュートンの代理人クラークとのあいだで行われた論争における中心問題の一つは「絶対空間」をめぐるものであった⁽¹⁰⁾。ライプニッツは主に「不可識別者同一律」という形而上学的原理にもとづいて絶対空間の存在を否定し、空間を物体が共存するさいの「共存の秩序」とみなす空間の関係説を主張した（米山・佐々木訳，同上書，285頁を参照）。先述したように、ニュートンが絶対空間の存在を要請したのは、ニュートン力学の原理としての運動の三法則がそこで成り立つための場としてであった。したがって、絶対空間の存在が否定されることは、ニュートン力学全体の真理性が根本的に疑問に付されることを意味するはずである⁽¹¹⁾。要するに、空間の関係説をその重要な一部として含むライプニッツおよびヴォルフの形而上学は本質的に、絶対空間の存在要請にもとづくニュートン力学とは相容れない面を有している。現に上述した『動力学試論』中に展開されているライプニッツの運動論は、慣性抵抗と反作用との同一視に典型的に見られるように、ニュートン力学の運動論とは根本的に異なる代物である⁽¹²⁾。それゆえライプニッツ・ヴォルフ形而上学の枠組の下にニュートン自然哲学を基礎づけようとするのは、あたかも水と油を一緒にしようとする

る試みに思われるのだが、カントは何故こうした試みを、しかもかなり長期にわたって遂行しようとしたのであろうか。

この点を理解するためには、以下のような科学史的知見が役に立つ。それによれば、18世紀前半のヨーロッパ大陸におけるニュートン自然哲学の受容の実態は、現代のわれわれが想像するように、いわゆるニュートン力学の定礎者としてニュートンを受容するのではなく、「当時、大陸において Newton の名前は、ただもっぱら Descartes の渦動仮説に対する万有引力理論にのみ結びつけられていた」⁽¹³⁾ というものである。つまり、当時の大陸諸国では、ニュートン力学のうち、重力理論だけがニュートン独自の業績とみなされ、ニュートンといえば、第一に重力理論の提唱者として知られていた、ということである。これに加えて、ニュートン自身に起因する実証主義の浸透によって、当初はデカルト派やライプニッツがその形而上学的根拠から問題視した、遠隔作用としての重力の概念もまた問題視されなくなっていた。このような状況下でニュートン自然哲学をライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学によって基礎づけようとする試みに従事していたカントが理解していたニュートン理論の中心もまた、ニュートン力学の原理としての運動の三法則ではなく、その力学的・数学的な導出過程から切り離された重力理論にあった。この点は、処女作『活力測定考』の内容から明白に読み取ることができる。カントはそこで、「諸実体が自分の外部に作用する力をもたないとすると、空間も延長もあえないであろう」(I 23) と語って、空間の存在や性質が物体間の相互作用に依存する相対的・関係的なものであると主張し、さらに、そのことを示す証拠として重力法則を挙げている。すなわち、空間の三次元性は重力の逆二乗法則からの帰結であり、もし重力法則が異なったものであったなら、異なった性質・構造をもった空間が帰結していたであろうと語って、ライプニッツ的な空間の相対説・関係説を提唱している (vgl. I 24)。他方でカントは、ニュートン力学の根本原理である「慣性の法則」についても言及しているが、慣性法則がはたらくのは物体が一定の速度に達してからであり、かつ、その一定速度が維持されるのは、物体に内在する力によってである、といった文言 (vgl. I 55) から明らかなように、この時期のカントはニュートン力学の基本すら理解できていなかった。したがって当然のことながら、運動の三法則とりわけ慣性法則の前提としてニュートンが要請した絶対空間の意義について省察することなど、とうてい不可能だったのである。

以上のように、若きカントが受容し傾倒したニュートン自然哲学の中心は、ニュートン力学の基礎理論から切り離された、その重力理論にあった。また上述したように、当初はデカルト派やライプニッツが攻撃し、ニュートン自身もまた (形而上学的には) 否定していた遠隔作用としての重力という概念⁽¹⁴⁾、すなわち物質そのものに内在し、空虚な空間を隔てて直接、相互に作用し合う力という概念に含まれる問題点が表立って論

じられることも、18世紀前半には見られなくなった。そこで、カントによるニュートン自然哲学の形而上学的基礎づけの構想は、具体的には、ニュートンの重力理論に整合し、かつ空間の関係説を自らのうちに含むような形而上学ないし存在論を打ち立てるといふ形をとることになる。その成果が55年の『新解明』である。次にその内容を概観してみよう。

『新解明』はカントが最初に著した形而上学の書であり、根底に実体一般に関する根本規定の学としての一般形而上学ないし存在論が据えられ、その土台の上に物的自然の形而上学が展開されているという形をもった、基本的にライプニッツ・ヴォルフ形而上学の枠内にある著作である。しかし、最後の第三章にはカント独自の形而上学的思想が提示されており、その中心は「改善された物理的影響説」(I 416)にある。すなわち、カントはここで、いかなる被造的実体の状態変化も「諸実体の相互依存関係」(I 410)つまり諸実体の実在的な相互作用の結果としてのみ可能であると主張し、実体間の観念的な対応関係しか認めないライプニッツの予定調和説を根本的に否定している。なおヴォルフについては、「現象のレベルではものともとの実在的作用関係を認めるような言葉づかいをしている。…にも関わらず、…実体レベルでは〔つまり形而上学のレベルでは〕、ヴォルフは力の実在的作用関係を認めていない」⁽¹⁵⁾(挿入引用者)という山本道雄の指摘から明らかのように、ここでのカントの形而上学説はヴォルフのそれとも異なるものであろう。カントは、諸実体のこうした実在的な相互作用の根拠を追究し(「命題 XIII」)、それが、独立存在としての実体の単なる概念のうちには求められない以上、「諸実体の存在の共通原理としての神の知性」(I 413)にその根拠が求められねばならないと論じる。いかにも独断的な、こうした論法の是非についてはしばらく措く。むしろ、ここで興味深いのは、この論証の途中でカントが次のように語っている点である。

個々の実体が他の実体から独立した存在をもっているかぎり、それらの相互的結合はない。にも関わらず、宇宙における一切が相互に結合されているのが見いだされるのであるから、この〔実体間の実在的な相互作用という〕関係は共通の原因、つまり存在者の普遍的原理である神に依存していることが認められねばならない。

(ibid. 挿入引用者)

ここで、経験的に見いだされる宇宙全体における一切の結合とは、いうまでもなくニュートンの重力ないし万有引力の法則を指している。つまりカントはここで、被造的実体全体が実在的な相互作用のうちにあることの証拠として、ニュートンの重力法則を挙げているのである。本来、形而上学的論証のうちに経験的な自然法則を根拠として持ち込むことは、許容されはしても、せいぜい傍証にとどまるはずであるのに、そうした経験的

法則をあえてここに持ち込んだことは、カントがいかにニュートンの重力理論に傾倒し、それを拠り所として自らの形而上学説を構築しようとしていたかを如実に物語るものであると言えるだろう。

さらにカントは、この命題 XIII からの帰結として、「場所、位置、空間は諸実体の関係である」(I 414) ことを導き出している。こうしてカントは、実体間の実在的な相互作用を核とする自らの形而上学のうちに空間の関係説が含まれることを示し、さらに、形而上学的レベルで成立する実体間の実在的な相互作用の「外的現象」(I 415) として、重力による全宇宙の結合が見いだされるのだと論じて、ニュートン自然哲学とライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学との結合を図ったのである。なるほど、ニュートンの重力理論に限定すれば、上に見てきたカントの形而上学説に対して、相応の妥当性を認めることができるかも知れない。しかし、ニュートン自然哲学の基礎部門である力学論ないし運動論を考慮に入れるならば、空間の関係説という相対主義的な空間論をうちに含むカントの形而上学説が、そのままの形でニュートン自然哲学と折り合えるとは考えられない。だとすれば、ニュートン力学に関する理解が深まるに依りて、カントは自らの形而上学説に対して次第に深刻な疑念を抱くことになるであろう。カントの行く手は険しいと言わざるをえない。しかし、先を急ぐ前に、『新解明』で提示されたこうした形而上学に対応する、カントの自然哲学上の著作である『自然モナド論』の内容を見ておこう。

『自然モナド論』の正式なタイトルは『形而上学を幾何学と結びつけて自然哲学に役立てること、その最初の試みとしての自然モナド論』というものである。先述した通り、ニュートン力学に代表される、数学の適用にもとづく近代の数学的自然科学をその本質的な部分として含む点こそが、近代自然哲学の最大の特徴であり、カントもまた、こうした潮流に掉さす者の一人であった。ただ若きカントは、デカルトのように物体即延長のテーゼを基軸にして、幾何学的・数学的知見に全面的に適合するような新たな形而上学を構築するという道を行くのではなく、スコラ哲学の伝統を色濃く残すライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学に依拠するという道を選んだ。そのため、幾何学的・数学的知見と形而上学的知見とが、しばしば対立するという問題に直面した。そこで、「形而上学を幾何学と結びつけて自然哲学に役立てる」というカントの構想は、具体的には数学的知見と形而上学的知見との対立を、なんらかの仕方で調停する試みとして示されることになる。

このような戦略はじつは処女作『活力測定考』のうちで、すでに実施されていたものであった。周知のように『活力測定考』のテーマは、運動状態にある物体がもつ力を測定する尺度として、デカルト派の mv (質量×速度) を採るか、それともライプニッツ派の mv^2 (質量×速度の2乗) を採るべきかという、いわゆる活力論争をいかにして解決できるか、というものである。これに対するカントの解決策は、デカルト派の力の

尺度 mv が数学的考察のレベルで成り立つのに対し、ライプニッツ派の力の尺度 mv^2 は形而上学的考察のレベルで成り立つという、折衷的な調停策であった。このような解決策の妥当性如何はここでは問題にしない。ここでは以下の点だけを確認しておきたい。

近代自然哲学の基本的概念（ここでは運動物体のもつ力という概念）は、数学と形而上学双方の知見が結びついて成立するものであり、もし両者の知見が対立する場合には、なんらかの仕方で調停が図られなくてはならない、と若きカントは考えていた。なるほど『活力測定考』における解決策がどれほど思想的に未熟であったにせよ、自然哲学ないし自然科学が成立するための必然的条件として、数学と形而上学とが結びつかなくてはならないという思想そのものに関するかぎり、カントはこれを終生、手放すことはなかったのである。⁽¹⁶⁾

さて『自然モナド論』における中心テーマは以下のようなものである。自然哲学の対象は空間のうちなる物体であるが、「物体が占める空間は無限分割可能である」(I 478) という明白な数学的真理と、「物体は単純実体から成る」(ibid.) という形而上学的真理とが、対立した主張でありながら、物的世界に関してともに成り立つように見える。相対立するこの二つの真理をいかにして調停するか（ここで物体を構成する単純実体は「自然モナド」と呼ばれるが、松山壽一が注意するように⁽¹⁷⁾、この自然モナドをライプニッツのモナド概念と結びつけることは誤りであり、むしろ、モナドを物的なものとし精神的なものに区別したヴォルフに由来するところの、表象能力を欠き単に空間を占めるだけの、ただし大きさをもたない点的アトムの種類とみなすべきである）。物体が空間を占めることは「不可入性」と呼ばれるが、この不可入性という性質は、機械論者のいうアトムに備わると想定された絶対的な剛性によるのではなく、物体の構成要素である単純実体に備わる根源的な斥力による（このような物体論は批判期の表現を借用すれば「機械論的自然哲学」(IV 532) に対する「動力的自然哲学」(ibid.) と呼ばれるが、ここでは詳論できない⁽¹⁸⁾）。したがって、幾何学者の主張する無限分割可能性は、単純実体その力によって張り巡らす作用領域には妥当するものの、単純実体そのものには及ばないことになる。こうして、空間の無限分割可能性という幾何学的・数学的真理と、物体は単純実体から成るとい形而上学的真理とが、物的世界に関してともに成り立つことが示された。

さて、カントによって示された以上の調停案には、それを支える要となっている根本前提が存在する。それこそが空間の関係説にほかならない。なぜなら、空間が実体そのものではなく、実体間関係であるからこそ、空間の無限分割可能性はそうした関係についてのみ妥当し、実体そのものには妥当しないと言えるからである。カントは『自然モナド論』の中で、空間が「まったく実体性を欠き、…諸々のモナドの外的関係の現象である」(I 479) ことを自明のごとく語っているが、この事実は、『自然モナド論』が

『新解明』で論証された空間の関係説に依拠した自然哲学であることを明白に物語っている。しかし、そうだとすれば、仮になんらかの論拠によって空間の関係説という前提が崩れることがあれば、『自然モノ論』における数学的真理と形而上学的真理との調停案とともに崩壊することになる。それどころか、空間の関係説をその本質的な部分として含む『新解明』の形而上学の立場そのものが崩れ去ることになるであろう。ここに、近代の数学的自然科学の形而上学的基礎づけを主要なテーマとする若きカントの哲学形成の成否を握る鍵が、その空間論に存することが明らかとなった。しかし、この問題が深刻な形で露呈するのは、68年の『方位論文』においてである。次章では、そこに至る前の60年代前半におけるカントの哲学を見て行くが、その前に、物体の運動と空間との関係をあつかった58年の『運動と静止』の概要を見ておこう。

近代力学の形成過程で、ニュートン自身を含む多くの自然研究者によって使用された「慣性力」(vis inertiae)という概念は、哲学的な観点から見たとき、多くのあいまいさ、不可解さを含んでいた。こうした実情に対して、運動と静止に関する徹底した相対主義的理解にもとづいて、慣性力の概念を「不必要に仮構された」(II 20)概念として自然哲学から追放すること、それが『運動と静止』の主要テーマである。しかし、この点に関してはすでに他の機会に論じたことがあるので⁽¹⁹⁾、ここでは空間論に関係するかぎり、その内容を簡潔に見ておこう。

冒頭、まず目につくのは、デカルト、ライブニッツ的な運動・静止に関する相対主義的な理解を示した直後に、ニュートン的な絶対空間を端的に否定している点である。

私は運動や静止という表現をけって絶対的な意味にもちいてはならず、つねに相対的な意味にのみもちいなくてはならない。…あらゆる被造物を除いた数学的な空間〔すなわちニュートンの絶対空間〕を、諸物体を入れる容器として想像してみたところで、それは何の役にも立たない。 (II 399, 挿入引用者)

ところがカントは、こうした相対主義的な運動理解、空間理解の下でなお、真の運動と見かけの運動との区別が可能であることを示そうとする。この点はカントの運動論、空間論を理解する上で、きわめて重要な論点である。というのも、ニュートンが絶対空間を導入したのは、まさしくこうした真の運動と見かけの運動を区別するためだったからである。すなわち、ニュートンの場合には、真の運動イコール絶対運動、見かけの運動イコール相対運動であり、この真の運動イコール絶対運動を記述するための枠組として絶対空間が導入される⁽²⁰⁾。これに対してカントは、相対主義的な運動概念、空間概念の下で真の運動と見かけの運動との区別が可能であることを示そうとする。その概要は以下の通りである。

われわれの知覚に直接与えられている空間ないし座標系、たとえば大地に定位する座標系で静止している物体 A に、一定速度で接近してくる物体 B が、その直後に衝突した場合、その衝突を力学的に正しく記述するためには、静止している A に B が接近すると理解してはならず、両物体は「たがいに接近し合っている」(II 17) と理解すべきであり、したがって双方に「同等の〔つまり同じ大きさの〕運動〔量〕を与えるべきである」(II 18, 挿入引用者) とカントは言う。ここで、衝突する両物体に同じ大きさの運動量を与えるべきだとする主張は、力学的な力の尺度として、作用を及ぼす運動物体の運動量をそれに充てるという非ニュートン力学的な力概念をカントが抱懐していたことにもとづく⁽²¹⁾ (これに対してニュートン力学では、外力の大きさは作用をこうむる側の物体の運動状態の変化で測られる)。こうしてカントは、われわれの知覚に直接与えられる座標系において記述される運動が見かけの運動であるのに対し、物体の衝突といった相互作用が見られる運動を記述する場合には、両物体の運動量の大きさが等しくなるように記述できる座標系、すなわち共通重心座標系においてのみ「真の運動」(ibid.) が記述されるという結論を導く。カントによれば、この真の運動が相対運動とみなされるのは、運動と力の関係をテーマとする力学的考察のレベルでは、一個の物体の運動ではなく複数の物体が「たがいに接近し合う」相互的な運動として、すべての運動を理解しなくてはならないからである。

こうしてカントは、ニュートンのように絶対運動、絶対空間の概念に依拠することなく、真の運動と見かけの運動との区別を与えることができた。その要諦は、複数の物体間の相互作用の場の中で、はじめて真の運動を理解することが可能となる、という点にある。このような運動理解、したがってまた『運動と静止』の自然哲学が、実体間の実在的な相互作用を根本原理とする『新解明』の形而上学と整合的であり、そうした形而上学の土台の上で可能となることは、もはや明らかであろう。

ただし、共通重心座標系における運動記述が絶対空間の概念をまったく抜きにして可能であるか、この点は問題として残る。この点について『運動と静止』は何も語っていないが、批判期の著作『原理』は、この問題を正面から取り上げ、そこでニュートンとは異なったカント独自の絶対空間の必然性を論証している⁽²²⁾。しかし本論考では、これ以上この問題に立ち入ることはできない。

第三章 60年代前半におけるカントの自然哲学と形而上学

まず63年の『負量の概念』から見てゆこう。この論文は、その正式名称『負量の概念を哲学に導入する試み』から知られるように、数学で用いられているプラス、マイナスの符号のついた数量が自然哲学の対象に適用される場合に、その使用を正当化する根

抛を形而上学のうちに見いだそうとする試みである。したがって『負量の概念』は、『活力測定考』『自然モノ論』『運動と静止』と続くカントの自然哲学と基本的に同一の構図の下にある。ただ、これらの著作群とは大きく異なる点がある。それはカントが、これらの著作では数学的真理と形而上学的真理とをいかにして調停するかという問題意識の下に哲学的考察を展開していたのに対し、『負量の概念』では、自然哲学の対象への数学的真理の適用可能性を根拠づけるにさいして、伝統的形而上学の知見を役立たずとみなし、むしろ数学的知見に適合するような仕方新たな形而上学を模索している、という点である。こうした点は、本著作の冒頭部分におけるカントの以下のような文言から明瞭に読み取ることができる。

〔旧来の〕形而上学という学問は、数学の諸概念や教説を利用する代わりに、しばしば数学に対して武装してきた。そして、〔数学から〕堅固な基礎を借り受けることによって形而上学的考察をそうした基礎の上におくことができたかも知れないのに、数学者の諸概念を…精緻な虚構としてしか理解しなかった。しかし、この二つの学問の争いにおいて、どちらに分があるのか、言い当てることは容易であろう。

(II 167, 挿入引用者)

さてカントによれば、形而上学の方法という観点から見た場合に、伝統的形而上学の問題点が集約的に現れるのが、「実在性」(Realität, II 172) という概念である。「実在性」とは(『批判』の表現を借用するならば)「物の規定」(A598/B626)、より正確には「物の現実存在に属する」(B225) 規定を意味し、具体的には色や重さ、明るさといった感覚的性質、不可入性や運動力といった物理的性質、さらに人間が対象である場合には、人間のもつ知力や感情など、きわめて多くのものが実在性と呼ばれる。もう一点、実在的と呼ばれる物の規定は、何か積極的なもの、肯定的なものを含んでいる。暗黒に対する光明、静止に対する運動、死に対する生ないし不死、無知に対する知などが実在性であり、暗黒、静止、死などは「否定性」(Negation, II 172) と呼ばれる。では伝統的形而上学における実在性概念の捉え方にどのような問題があるのか。カントによれば、それは実在性同士の対立という自然界にありふれた事象を、伝統的形而上学のやり方ではうまく説明することができない、という点にある。カントの説明を見てみよう。

「同一の物について、あることが肯定されると同時に否定される」(II 171) ような場合に見られる対立は「論理的対立」(ibid.) と呼ばれ、こうした事態が成立不可能であることは矛盾律にもとづく。たとえば一艘の船が運動していると同時に運動していない(静止している)という事態は不可能である。これに対して「一つの物に付される二つの述語が対立していても、それが矛盾律による対立ではない」(ibid.) 場合、そうした

対立が「実在的対立」(ibid.) と呼ばれる。たとえば船が東に向かって進もうとする(力をもつ)ことと、西に向かって進もうとする(力をもつ)こととは、二つの対立する述語であるが、この二つの述語を同一の船に同時に述定することは可能であり、その結果が否定的なもの(たとえば静止)となるだけである⁽²³⁾。ここで実在的な対立の結果として生じる否定的なものが、実在性に対する否定性である。ただし、この否定性は実在的な対立の結果として生じるだけでなく、ある結果を生み出す積極的な根拠(これは後に「実在的な根拠」(II 190) と呼ばれる)が欠如ないし不在であるために生じる場合もある。前者の否定性が「剥奪」(II 177)つまり相殺による否定性、後者のそれが「欠如」(II 178)による否定性と呼ばれる。そして、こうした相殺あるいは欠如による否定性をゼロで表し、実在的に対立する各々の積極的な根拠(実在的根拠)の量、あるいは、その各根拠が単独で定立された場合に生じる帰結(実在的帰結)の量を正負の符号で表すことができる。そのさい、正負の符号の意味はまったく相対的なもの、便宜的なものであり、負の符号が付された量は「それ自体では真に積極的なもの」(II 169)、実在的なものである。こうして、数学で用いられている正負の符号を自然界の対象に適用することの正当性が示された。いいかえれば、正負の符号は実在的な対立を表すものとして、実在的な意味が与えられたことになる。

しかし、以上に見てきたカントの説明はことごとくとしては明瞭であるのだが、それがどのようにして伝統的形而上学に対する批判と結びつくのか、その点が不明なままである。だが、この点を意識しながら、あらためて第一章の冒頭の一文を読み直してみると、カントのこれまでの説明と、伝統的形而上学に対する批判との結びつきの端緒が見えてくる。カントは言う。「従来は論理的対立だけに注意が向けられてきた」(II 171)。主語は明示されていないが、それが伝統的形而上学であることはまちがいない。したがってカントはここで、伝統的形而上学が論理的対立だけに注目し実在的対立を無視してきた、と言わんとしている。ただし伝統的形而上学は、じっさいには実在的対立を無視してきたわけではなく、善と悪の対立は真実には存在せず、悪は真実には善の欠如ないし不在にすぎないとする、アウグスティヌス以来の伝統的なキリスト教神学思想を背景として、実在的対立を実在性と否定性との(消極的な)対立に還元しようとする思想傾向を有していた⁽²⁴⁾。実在性同士は対立しないとする考えも、そこから導かれる。だからこそカントは本著作の中で、実在的対立を実在性と否定性との対立に還元した場合に生じる不合理を、執拗なまでに指摘しているのである⁽²⁵⁾。要するに、論理的対立だけに着目し矛盾律に依拠するだけでは、実在性同士の(積極的な)対立と、実在性と否定性との(消極的な)対立という二種類の対立を正しく区別することができない、というのが伝統的形而上学に対するカントの批判の要点である。

だが、本著作における伝統的形而上学に対するカントの批判は、これだけにとどまる

ものではない。彼の批判の矛先は、伝統的形而上学の最深部にまで達していたと思われる。この点は本著作の末尾に付された「総注」(II 201ff.) から読み取ることができる。カントはそこで次のような主張を行っている。

ある帰結が、いかにしてある根拠によって同一律に従って定立されるのか、私はよく知っている。なぜなら、その帰結は概念の分析を通じて根拠のうちに含まれていることが分かるからである。…しかし、あるものが別のあるものから、いかにして同一律によることなく定立されるのか、この点こそ〔伝統的形而上学に対して〕是非とも明らかにしてもらいたいと望んでいることがらなのである。第一の種類の根拠を私は論理的な根拠と名づけ…、第二の種類のそれを実在的根拠と名づける。…この実在的根拠および、その帰結との関係については、私の問いは単純な形で述べることができる。〈あるものが存在するがゆえに別のあるものが存在することを、私はいかにして理解したらよいのか〉。…原因と結果ということばの前で私は引き下がらない。なぜなら、私があるものを別のあるものの原因とみなす場合、私はすでに原因のうちに、実在的な根拠と帰結の関係を考えているからである。…このような関係〔がいかにして可能か、その点〕こそ、私が〔伝統的形而上学に対して〕説明してもらいたい点なのである。 (II 202f. 挿入引用者)

ここでカントは伝統的形而上学に対して、自分の問いに答えるよう請願する形をとっているが、これがカントのレトリックであることは言うまでもなく、伝統的形而上学はこうした問いに答えることができないと暗に主張している。すなわち、「概念の分析」という方法に従い、論理的対立のみに注目し、同一律ないし矛盾律を原理とする伝統的形而上学によっても、実在的な根拠と帰結の関係がいかにして可能となるかを説明することができない。それがここでのカントの主張の骨子である。この実在的な根拠と帰結の関係は原因・結果の関係と言い替えられている。したがって伝統的形而上学は、因果律が実在的世界に妥当することの哲学的な根拠を与えることができないとカントは主張しているわけである（ここで当然、ヒュームとの関係が問題となるが、ここではこの問題に立ち入る余裕はない⁽²⁶⁾）。要するに、論理的対立だけに注目し概念分析をこととする伝統的形而上学は、レス（物）の世界、この実在的世界についての真理を語るべき真の形而上学たりえないという判決が、あるいはそこまででなくとも、根本的な疑念が言い渡されたことになる。

ただしカントはここで、伝統的形而上学に替わる新たな形而上学を提示しているわけではない。彼が論じたのは、実在的な根拠と帰結の関係、さらには実在性同士の対立関係という、実在的世界の普遍的な事象を成立させている根拠を従来の形而上学のうちに

は見いだせないということだけである。注意すべきは、ライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学的枠組の下に形成された『新解明』の形而上学もまた、この伝統的形而上学に算入されるという事態である。したがって、『負量の概念』で示された伝統的形而上学に対する根本的な疑念は、これまでの自己自身の形而上学に対しても、あるいはむしろ自己自身の形而上学に対してこそ、向けられていることになる。上に「総注」から引用した文章の直前でカントは、「私は自分の洞察力の弱さのせいで、すべての人が容易に理解できると思っているたいていのことがらが、いささかも理解できない」(II 201)と語っている。この一文からは、形而上学に対する当時のカントのかなり深刻な疑念を読み取ることができる。

さて、以上見てきた『負量の概念』に対応する形而上学の書と見られる、64年公刊の『判明性論文』の内容を見ておく必要があるが、その内容は、『負量の概念』を検討する中で見てきた、形而上学に対するカントの見解にほぼ沿ったものであるので、ごく簡潔に見ておくにとどめる。

『判明性論文』におけるカントの主張のポイントは、数学と形而上学では、その認識方法に根本的な相違があり、ゆえに数学の方法を形而上学が模倣することはできない、という点にある。カントによれば、数学の方法は「概念を任意に結合すること」(II 276)から始まり、したがって概念の定義(および公理)が最初におかれ(たとえば「三角形」は三本の直線に囲まれた図形として定義され、この定義に先立って三角形の概念は存在しない)、そこから諸命題が演繹的に導出される。これに対して、「哲学の仕事は、混乱したものとして与えられている諸概念を分析して、余すことなく尽くされた明確なものにすることである」(II 278)。したがって、哲学ないし形而上学の方法として概念分析が否定されたわけではない。問題は、そうした分析に先立って与えられる諸概念もしくは諸命題をどこに求めるべきか、という点にある。数学の場合、たとえば幾何学ではその基礎に証明できない少数の命題が据えられるが、これらの命題は「直接に確実なもの」(II 281)とみなされ、公理と呼ばれる。これに対して形而上学の場合も、「この学問の根底に…証明できない諸命題が一覧表に記されたもの」(ibid.)がおかれるべきだが、現状では、そうした諸命題は見いだされていない。したがって「そのような証明できない根本真理を捜し求めることこそ、上級哲学〔形而上学〕のもっとも重要な課題である」(ibid. 挿入引用者)。

要するに当時のカントの考えによれば、真正な形而上学の名に値する形而上学はいまだ存在せず、そのためには、何よりもまず、その土台をなすはずの根本真理を発見する必要がある。したがってカントは、旧来の形而上学を否定しはするものの、形而上学の可能性そのものを否定しているわけではなく、ただ暗中模索の状況に身をおいている、ということである。しかし、その後、68年の『方位論文』に至って、事態は急展開す

る。次に『方位論文』の内容を見てゆこう。

第四章 『方位論文』の衝撃

『方位論文』のテーマは以下のようなものである。カントによれば、東西南北および上下といった、空間における「方位」(Gegend, II 377) という概念は、空間における諸部分間の位置関係にもとづくのではなく、もろもろの位置関係が「絶対的な宇宙空間に対してもつ関係」(ibid.) にもとづくものである。この点を、右手と左手や現物と鏡像といった「不一致対称物」(ein inkongruentes Gegenstück, II 382) の存在に訴えて論証すること、要するに、実在的な絶対空間の存在を論証することが本著作のテーマである。空間の性質や構造は、いうまでもなく幾何学があつかう対象である。したがって本著作は、幾何学を実在的な空間に適用するさい、その適用を正当化する哲学的根拠を解明する試みであると言ってよい。そのかぎりでは本著作は、処女作以来カントが取り組んできた、自然哲学と形而上学との関係というテーマの一環と見ることができる。とはいえ、カントはこれまで一貫して、ライブニッツ的な空間の関係説という形而上学的前提の下で、このテーマに取り組んできた。したがって、この前提が覆されることになれば、その影響は単に空間論という哲学の一テーマにとどまるものではありえず、カントのこれまでの哲学的営為全体に及ぶことになろう。その意味で『方位論文』は、カントの哲学的進展における、きわめて重要なターニングポイント、あるいは彼の批判哲学へと向かう重要な里程標とみなすことができる。

ところが『方位論文』に関する従来の諸研究では、本著作をカントの哲学的進展の歩みから切り離して、不一致対称物に関するカントの議論の妥当性を、空間の関係説を擁護する立場から批判したり、トポロジーのような現代数学との関係の観点から論じたりするものが多く見られる⁽²⁷⁾。こうした研究はそれ自体としては、きわめて魅力的であり意義深いものではあるが、本論考の主旨とは一致しないので、多くを語ることは差し控えたい(ただし、空間の関係説擁護の立場からのカント批判に対しては、カント擁護の立場から後に反批判を試みる)。またカントの哲学理論の進展と結びつける場合でも、せいぜい本著作が、感性的直観の形式としての空間という、空間の超越論的観念性の理論へのきっかけを与えたという指摘にとどまるものが大半である⁽²⁸⁾。しかし、近年の研究の中には、「カントが批判哲学へと転換するさい、68年論文の果たした決定的な役割をカント研究者たちは無視してきた」⁽²⁹⁾と語って、『方位論文』を批判哲学へと至る重要なファクターとしてカントの哲学的進展の文脈のうちに位置づけようとするB.ファルケンバーグのような研究も現れてきた。本論考も、こうした研究動向に沿ったものである。

さて、しかしながら先に見ておいたように、そもそも絶対空間は、ニュートンが自らの力学理論の基礎に据えた運動の三法則、とりわけ慣性の法則が、そこで成り立つための場として、その存在が要請されたものであった。だとすれば、『方位論文』における絶対空間の存在論証は、ニュートンの力学的な絶対空間に対する哲学的な基礎づけの試みとして理解されるべきものではないだろうか。この問題については、すでに他の機会に詳論しておいたが、『方位論文』のテーマをめぐる重要な論点であるので、以下に、ほぼそのままの形で再掲しておく⁽³⁰⁾。

『方位論文』におけるカントの論証がニュートンの力学的な絶対空間の存在を示そうとしたものであるという解釈は、同論文中でカントがL.オイラーの名を挙げ、しかも1748年に公刊された『空間と時間についての省察』という彼の論文に言及している、という事実を考慮に入れるとき、きわめて妥当な解釈であるように見える。オイラーはたしかに当該論文において、慣性の法則が力学の基礎としてすでに十分な真理性を獲得しているという事実を根拠に、絶対空間の存在の必然性を導いている。そこでわれわれは、カントがオイラーとは別の根拠、すなち「不一致対称物」の存在にもとづいてニュートンの絶対空間の存在論証を行うことによって、オイラーの論証を補完しようとしたのだ、と解したくなる。しかし、以下の文言から読み取ることができるように、カントはオイラーの論証に、けっして満足しているわけではない。

しかし、〔オイラーの〕この論証はその目的を完全に達成したとは言えない。というのも、その論証が示したのは、もし仮に現実に存在する物体を捨象することによって作られた空間〔すなわち相対空間〕のほかに、なんの空間も想定しないならば、その場合には、ごく一般的な運動法則〔慣性法則〕にしかるべき意味を与えることも困難になる、ということだけだからである。しかし、その論文が触れていないのは、そこで言われた運動法則を絶対空間の概念にしたがって具体的に表象しようとする、その困難にも劣らぬ困難がまだ残されている、ということである。

(II 378, 挿入引用者)

ここに見られる通り、明らかにカントは絶対空間に関するオイラーの論証に納得しているわけではない。その理由は、絶対空間のうちで慣性法則を具体的に表象しようとする場合に生じる困難にある。この困難とは何か。それはまちがいでなく、その場合には絶対運動を承認せざるをえなくなる、という困難である。なぜなら慣性法則は、宇宙にただ一個の物体しか存在しないとしても、その物体の真なる運動について、したがってまた絶対運動について、有意味に語りうることを要求するからである。この点でカントは、ニュートンの絶対空間の存在論証を与えたとするオイラーの主張に対して、保留ないし

不承認を表明しているのである。

しかし、それではカント自身はこの『方位論文』において、絶対空間に関わるこの困難を克服し、もってニュートンの力学的な絶対空間に対する存在論証を与えているであろうか。これも否である。不一致対称物の存在を引き合いにだすカントの論証は、「力学者 (Mechaniker) に対するものではなく、ほかならぬ幾何学者 (Messkünstler) に対する」(ibid.) ものであり、それによって論証されるべき空間は、「幾何学者たちが考えるがままの普遍的な絶対空間」(II 381) である。そうした絶対空間は、たとえば球面上に線対称に描かれた二つの不等辺三角形が、対応する辺と角とがすべて等しい大きさであるにもかかわらず、互いに重ね合わせることができないという、「幾何学が含むところの延長に関する直観的判断」(II 378) によって指示される場として導入される。このように、ここでカントが論じている絶対空間は、幾何学固有の直観的判断によって指示され、したがって幾何学において前提されるべき空間を意味しており、慣性法則の成立を保証する場としての力学的な絶対空間を意味してはいないのである。何より、ニュートンの力学的絶対空間の最大の特徴であるはずの絶対静止について、本著作はまったく触れていない。

以上、再掲された拙論から明らかなように、カントが『方位論文』で問題にした絶対空間は、ニュートンの力学的な絶対空間ではなく、幾何学者があつかう絶対空間である(なお付言すれば、ニュートンの力学的な絶対空間の概念に正面から対峙し、「理念としての絶対空間」(IV 559) というカント独自の絶対空間の概念を提示するのは、批判期の著作『原理』においてであり、したがって本論考の守備範囲を超えている)。ただし、それは単に想像された、あるいは単に思惟されただけの空間ではなく、この世界の枠組をなす実在的な絶対空間である。この点は、先に触れたライプニッツ的な空間の関係説を擁護する立場からのカントの議論に対する批判の問題とも関わる点であるので、以下に詳論したい。

右手と左手とは、対応する諸部分の大きさや形が完全に等しい場合でも、(右手用のぴったりした手袋を、けっして左手にはめることができないように) けっして完全に重ね合わせることができない。カントによれば、その理由は「[右手あるいは左手といった] 物体の形態を完全に規定する根拠が、単にその諸部分相互の関係と位置にもとづくだけではなく、それに加えて幾何学者たちが考えるがままの普遍的な絶対空間に対する関係にもとづいている」(II 381, 挿入引用者) からであるとされる。これに対して、ライプニッツ流の空間の関係説の支持者からは、次のような反論がよく挙げられる。ユークリッド二次元空間上で線対称に描かれた二つの不等辺三角形は、対応する辺と角との大きさがすべて等しいにもかかわらず、その平面上で図形を移動させるかぎり、互いに重ね合わせることができない、つまり両図形は互いに区別できる。ところが、その線を

中心に折り返せば重なり合う、つまり両図形は区別できない。要するに、二つの図形が重なり合うか重なり合わないか、いいかえれば二つの図形の区別がつくか、つかないかは、その図形が二次元空間のうちで考えられているか、それとも三次元空間のうちで考えられているかに応じて異なる。同様に、もし四次元空間を考えることができたなら、そのうちで右手と左手を重ね合わせることができるであろう。ゆえに右手と左手の区別は、それをどのような性質、構造をもった空間のうちで考えるかに応じて異なる、相対的な区別であって、絶対的な区別ではない。したがって不一致対称物の存在は絶対空間の存在を示す根拠とはなりえない、と⁽³¹⁾。

じつはカントは、こうした反論について先刻承知している。すでに見ておいたように、カントは『活力測定考』のうちで、空間の存在や構造が実体間の相互作用に依存する相対的なものであって、この実体間の相互作用の法則が異なっていれば、異なった性質や構造をもった空間が帰結したであろうと語っている (vgl. I 24)。そして『新解明』で主張されていたように、この実体間の相互作用の法則を最終的に決定するものは「神の知性」(I 413)、より正確には「神の知性の創造的表象」(I 414)であった。しかも神の知性は世界の創造にさいして、まったく自由に構想することができるのだから (vgl. *ibid.*)、空間の性質や構造は結局のところ、神の知性の自由で恣意的なはたらきによって決定されることになる。ゆえに神が別様な世界を構想したならば、別様な空間が成立していたわけである。なるほど、60年代前半のカントは、こうした独断的な形而上学に対する根本的な疑念を示していたが、空間の構造は知性によるかぎりでは、自由で恣意的な仕方でも思惟可能であるという理解については、カントはこれを批判期に至るまで手放すことはなかった。この点は、二角形、すなわち二本の直線で囲まれた図形という概念は矛盾を含んでおらず思惟可能であるという、『批判』のうちに表明されている、よく知られた文言からも明らかである (vgl. A220/B268)。

要するにカントは、四次元空間が思惟可能であることは十分承知しているのである。だが『方位論文』における空間の構造に関わる議論は、知性による思惟に依拠したものではない。それは「幾何学が含むところの、延長に関する直観的判断」(II 378)に依拠したものである。カントは東西南北や上下といった方位に関する説明を開始するにあたって、「物体的空間においては、その三つの次元のゆえに、互いに直交する三つの平面を考えることができる」(*ibid.*)と、いきなり語り出し、実在的空間が三次元を有することを自明のごとく前提している。これは実在的空間の三次元性が、直観的に知られる根源的な事実ないし所与であるとカントがみなしていることを明白に物語っている。なるほど『方位論文』の段階では、この直観がアプリアリな直観であることまでは明言されていないが、空間に関する幾何学的認識が、知性的思惟に依拠するのではなく「直観的判断」に依拠すべきものであることは、この段階でカントにより明確に理解されて

いる。したがって、四次元空間が思惟可能であれば、その空間のうちで右手と左手とが重なり合うであろうという、空間の関係説擁護の立場からの主張は、思惟されるかぎりでの空間については当てはまるであろうが、「幾何学が含むところの、延長に関する直観的判断」に依拠するカントの議論に対する批判とはなりえないのである。

さて、『方位論文』を論じるさいの論点としては、以上に見てきたような、実在的空間に関するカントの論証が、じっさいには何を論証しようとしたものであるのか、また、その論証は妥当といえるのか否か、といった論点の他に、もう一つの論点が存在する。実在的な絶対空間の存在を認めた場合に、それが真正の形而上学を求めて暗中模索の状況にあったカントの思考に、どのような影響を及ぼしたのか、という論点がそれである。次に、この問題を検討してみよう。

実在的な絶対空間の存在がひとたび承認されるならば、幾何学の物理的世界への適用可能性がただちに導かれ、さらには、『方位論文』では直接、論証されなかったものの、ニュートン力学の基礎におかれる力学的な絶対空間との関係という問題が視野に入ってくる。しかし、当時のカントにとっては、こうした問題以上に、より重大で深刻な問題が彼の心中を占めるようになったと思われる。それは次のような形而上学的ないし存在論的な問題である。カントによれば、「絶対空間はあらゆる物質の存在から独立であり、それ自身、物質の合成の可能性の第一根拠として、固有の実在性を有する」(II 378)はずのものである。ここで「物質の合成」とは「物体」を意味すると理解できる。したがってカントはここで、絶対空間が物体の可能性の第一根拠である、と主張しているわけである。これに対して55年の『新解明』では、一つの物体を形成する要素的な諸実体の実在的な相互作用は、結局のところ、それらの存在の「共通の根拠」(I 413)あるいは「存在者の普遍的な根拠」(ibid.)たる神によって可能となり、したがって実体間の関係としての空間もまた神によって可能となると主張されていた。つまり、『新解明』と『方位論文』では、根拠と帰結の関係がまったく逆になっている。矢印で表すと、前者では神→実体間の相互作用→空間として表されるのに対し、後者では絶対空間→物質の合成(=物体)として表され、後者では神の代わりに絶対空間が第一根拠の地位を占めることになる⁽³²⁾。だとすれば、絶対空間の存在を認めるかぎり、『新解明』で提示されたようなライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学を採用することは、単に疑わしいだけでなく、完全に不可能であるという帰結を避けることはできない。なぜなら、ライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学にもとづくかぎり、絶対空間の存在は「不可識別者同一律」に抵触するからである。

さらに、自然哲学と形而上学との関係という観点から見た場合に、『新解明』の形而上学に依拠した『自然モナド論』の戦略、すなわち自然哲学の対象に関して数学的真理と形而上学的真理とを両立させるための調停を図るという戦略を採ることも不可能であ

る、と結論せざるをえないように見える。なぜなら、絶対空間が物体の可能性の第一根拠である以上、空間に関する幾何学的真理である無限分割可能性は、必然的に物体そのものにも妥当し、したがって、物体は単純実体から成るという形而上学的真理は否定されざるをえないであろうからである。

ところが、きわめて興味深いことに、この期に及んで、なおカントは、物体が単純実体から成るという形而上学的命題を完全に手放そうとはしない。この点の詳細は次章で論じることにするが、要するに、一方で物体の存在に先行し、物体を可能にする根拠としての絶対空間の存在を認めながら、他方で、なおかつ形而上学的真理が可能となるためには、この絶対空間の在り方、したがってまた空間的世界の在り方はどのようなものとして考えられるべきか、という問題こそが、『方位論文』公刊直後にカントが直面した存在論上の大問題なのである。次章で論じる、いわゆる「69年の大いなる光」という、いささか芝居がかったカントの表現は、こうした文脈の下で理解されるべきである。

第五章 過渡期としての『就任論文』の形而上学

まず「69年の大いなる光」というカントの文言をどう理解すべきかという問題から見て行こう。カントは批判哲学を確立した後に、「覚書」の中で自らの哲学的進展を振り返って次のように記している。

私は最初、この教説を薄明のうちに見ていた。私は一つの命題を証明し、次にその反対命題を証明することを真剣に試みた。それは懐疑論を打ち立てるためではなく、知性の自己欺瞞 (Illusion des Verstandes) がどこに潜んでいるのかを発見しようと思ったからである。69年が私に大いなる光を与えてくれた。

(R5037, XVIII 69)

ここで言われている「この教説」を批判哲学と解して問題はないであろう。また「69年の大いなる光」が、空間（時間）を実在物、実体とみなすのではなく、われわれの感性的直観の主観的な形式とみなす、空間（時間）の超越論的観念性の理論を意味するものと理解してよいであろう。問題は、そのあいだに挟まれた「一つの命題を証明し、次にその反対命題を証明することを真剣に試みた」という一文をどう理解するか、という点にある。

一つの有力な解釈として、この一文が「純粋理性のアンチノミー」(A405/B432)を指示したものであるとする解釈が存在する⁽³³⁾。それによれば、純粋理性のアンチノミーの問題こそが、空間（時間）の超越論的観念性の発見へとカントを導いた鍵であるとみ

なされる。たしかに、『批判』の「純粋理性のアンチノミー」章における定立と反定立の証明は一見、この一文が示唆する通りの仕方で行われており (vgl. A431/B459)、この解釈の拠って立つ根拠もそこにある。だが、この解釈には根本的な問題がある。第一に、純粋理性のアンチノミーの場合、その解決の鍵をなすのは、単に空間・時間の超越論的観念性の理論だけではなく、それ以上に、純粋理性の「理念」(A321/B377)に関する批判哲学的考察である。とりわけ、被制約者が与えられている場合に、制約の全体は与えられているのではなく「課せられている」(A498/B526)という根本洞察は、これなしにはアンチノミーの解決が不可能であるが、70年以降の、いわゆる「沈黙の歲月」の中で得られ熟成されていったものであろう。もう一点、この解釈が拠る所とする上記「覚書」中の一文に関しては、じつは『就任論文』のうちでも、これに対応すると見られる箇所があり、しかも、その解決方法はアンチノミーで示されたものとは、まったく異なっている。「69年の大いなる光」が直接、関係しているのは、むしろこちらの箇所であると思われる。以下、『就任論文』の内容を追いながら、詳しく見てゆこう。

『就任論文』のうちで展開されている形而上学的理論は大略、以下のようなものである。まず、空間・時間がわれわれの感性的直観の主観的条件であるという洞察にもとづいて、空間・時間的世界は、われわれに対して現れる世界、現象界ないし感性界であり、これに対して、われわれの知性によって思惟される世界、知性界こそが、在るがままの客観的世界であるとされる。つまり、われわれ人間のもつ二つの認識能力たる感性と知性に、それぞれ固有の認識原理を認め、そうした認識原理の区別に応じて考えられる二つの世界、すなわち感性界と知性界について、前者には数学的真理が、後者には形而上学的真理がそれぞれ成り立つという仕方、両真理の棲み分けを図るというのが『就任論文』の基本戦略である。こうして、たとえば『方位論文』で示された絶対空間の根本規定である「あらゆる物質の存在からの独立性」(II 378)および「物質の合成の可能性の第一根拠」(ibid.)という規定が、感性を通じて世界を認識するさいの、われわれ人間の認識原理の特性として、あらためて捉え直され⁽³⁴⁾、そのことによって、空間は(外的)現象界のあらゆる事物の可能性の原理であると同時に、その管轄領域は知性界には及ばないことになる。こうした戦略は、数学的真理と形而上学的真理との両立を図るという点では『新解明』の戦略と同一であるにしても、『新解明』の場合、実体間の関係としての空間という根本把握にもとづいて、実体間の関係についての言明は実体そのものには及ばないという仕方、実体と関係に関する存在論的な位階の差に訴える戦略であったのに対し、『就任論文』では、感性と知性という認識の「起源」(II 393)の違いに関する認識論的考察が土台に据えられている点で、両者の戦略は根本的に異なっている。

では知性的認識としての形而上学的真理の内容は、具体的にはどのようなものか。驚

くべきことに、その内容は『新解明』で提示された形而上学の内容とほとんど同一のものである。すなわちカントは、「直観的に表象された場合に空間と呼ばれるところの、あらゆる実体の関係それ自体は、いかなる原理にもとづくのか」(II 407)、あるいは「多くの実体が相互に交渉し合うことはいかにして可能か」(ibid.)と問い、それに対して、「あらゆる実体は唯一の存在者に由来」(II 408)しており、「宇宙の諸実体の結合における統一は、あらゆる実体が一なる存在者〔すなわち神〕に依存していることからの帰結である」(ibid. 挿入引用者)と答えている。これが『新解明』の形而上学説とまったく同一の内容であることは一目瞭然である。63年の『負量の概念』の末尾で表明された、伝統的形而上学に対する根本的疑念が、あたかも忘れ去られてしまったかのようなのである。それだけに、かえって空間・時間の超越論的観念性の発見が、カントにとって形而上学の存亡を左右する決定的なできごとであったことを、逆に物語っていると言ってよいであろう。いずれにせよ、カントは知性的認識としての形而上学の内容という点から見れば、50年代の独断論的形而上学に完全に復帰したことになる。

さて、先述した「69年の大いなる光」をめぐる問題に関する内容は、『就任論文』の第五章に見られる。そこでは、感性的認識に固有の原理が知性的認識に影響を及ぼし、その結果、感性的なものを知性的なものに取り違える、あるいは「感性的概念を知性的表徴であるかのように称する知性の自己欺瞞 (praestigiae intellectus)」(II 412)が生じることが論じられている。たとえば、「どこかに存在するものは現実存在する」(ibid.)という命題は「文句なしに真である」(ibid.)が、これを逆にした「現実存在するものはどこかに存在する」(ibid.)という命題は、「どこかに存在する」という感性的概念が述語の位置にあるがゆえに、(空間の超越論的観念性の理論にもとづくかぎり)本来はこの命題を対象それ自体に関する客観的言明とみなしてはならず、対象を感性的に表象するさいの主観的条件とみなさなくてはならないのだが、これを客観的言明とみなしてしまうところに、「知性の自己欺瞞」が成立すると言われる。同様な知性の自己欺瞞は次のような場合にも生じる。「物体は単純体から成る」(II 416)という命題は、確実な知性的認識であるが、だからと言って、「合成体〔物体〕においては一定数の〔つまり有限個の〕部分が存在する」(II 415, 挿入引用者)という命題は、そこから確実に導かれるわけではない。にもかかわらず、なぜ知性はそうした推論を行ってしまうのか。カントによれば、合成体の部分への分割は時間の条件の下で行われるが、「無限の系列はわれわれの知性の制約のゆえに判明には認識されず」(II 415)、したがって有限の時間内には「無限の系列は不可能に思われる」(ibid.)ため、分割が単純体に達するかぎり、それは有限回の分割によってのみ可能であると、知性が自らを欺いてしまうからである。したがって、この知性の自己欺瞞を暴露することによって、一方における、物体が単純体から成ることと、他方における、物体の無限分割可能性との矛盾を避

けることが可能となる。いいかえれば、「物体は単純実体から成る」という形而上学的真理と、「物体は無限分割可能である」という数学的真理とが両立可能となる。すなわち、前者は、在るがままの物体に客観的に妥当する命題として、後者は、物体がわれわれに現象するための主観的条件を示す命題として、ともに成立するということである⁽³⁵⁾。上記「覚書」中の、「一つの命題を証明し、次にその反対命題を証明することを真剣に試みた」という一文に直接、対応するのは、両命題の真理性をともに認めた『就任論文』における、こうした議論であって、『批判』の第二アンチノミーにおける、定立と反定立をともに偽と結論づけた議論ではないであろう⁽³⁶⁾ (vgl. A528/B556)。

それでは、空間論から見たカント批判哲学の成立史という本論考のテーマ全体から見たとき、この『就任論文』にはどのような位置づけが与えられるであろうか。この点の検討をもって本論考を締め括ることにしよう。

『就任論文』は、空間・時間の超越論的観念性の発見をもって批判哲学への扉を最初に開いた。『就任論文』はまた、狭義の形而上学を講述するに先立って、われわれ自身の認識能力を吟味し、そこから明らかとなる「感性的認識と知性的認識の区別を教える学」(II 395)として、形而上学の「予備学」(ibid.)を先行させるという、批判哲学に直結する方法論上の根本思想をはじめて提示している。以上の二点において『就任論文』は、まちがいはなく批判哲学の成立に関わる、きわめて重要な地位を占めていると確言できる。

だが同時にまた、『就任論文』に展開されている純粋な知性的認識としての形而上学説に見られる、如何ともしがたい独断論的性格は覆い隠しようもない。この点はとりわけ、『就任論文』で示された知性の「論理的使用」(II 393)と「実在的使用」(ibid.)の区別に関するカントの理解に起因するところが大きい。カントによれば、知性の論理的使用とは、他から与えられる諸概念、諸認識を知性が矛盾律に従って整序することであり、これに対して知性の実在的使用とは、事物やその関係についての概念そのものを知性自身が与えるような使用を意味する。前者の使用はすべての学問に共通であるのに対し、後者の使用は純粋な知性的認識としての形而上学の場合にのみ見られる (vgl. ibid.)。ここで『批判』と比較した場合に、もっとも特徴的であるのは、『就任論文』では「多くの現象を知性によって比較することで得られる反省的認識が経験と呼ばれる」(II 394)と言われ、したがって、空間・時間の形式に従って与えられる多様な現象に知性の論理的使用が加わるだけで、経験が成立すると考えられている点である。ここには、経験の対象がそもそも対象として成り立つためには、「純粋悟性概念」(A76/B102)による多様な直観の総合統一のはたらきが必要であるとする、『批判』における対象構成の理論がまったく欠けている。他方、純粋な知性的認識としての形而上学における対象の認識には、知性の実在的使用が関与すると言われてはいるものの、形而上学の対象

に関する知性概念の實在的使用がいかにして可能か、という問いは立てられておらず、そうした使用の可能性が独断的に前提されているだけである。要するに、72年のマルクス・ヘルツ宛書簡の中ではじめて発せられた「形而上学の全秘密を解く鍵となる」(X 130) 問い、すなわち「われわれの内において表象と呼ばれるものが、対象と関係することはいかなる根拠にもとづくのか」(ibid.) という、批判哲学の核心に関わる問いが、『就任論文』ではいまだカントの問題意識に上っていない、ということである。

もう一点、自然哲学と形而上学との関係という観点からみたとき、『就任論文』は致命的な問題を抱えている。上述したように、カントは処女作以来、近代自然科学の形而上学的基礎づけという問題を自己の哲学の重要なテーマとしてきた。では『就任論文』では、この問題はどのように論じられているか。カントは一方で、ニュートンの重力法則が自然界すなわち感性界において成立することを認めている。他方でカントは、知性界における諸実体が實在的な相互作用を介して結合していることも認めている。だとすれば、自然界と知性界とでは同様の實在的な結合原理が見られるがゆえに、感性的自然界を支配する「自然法則」(II 404) が、知性界を支配する形而上学的原理によって基礎づけられていると理解することは、ごく自然なことのように思われる。だが、このような理解は『新解明』の場合には妥当であっても、『就任論文』の場合には成立しえない。それはなぜか。『新解明』では、形而上学が関わる実体的世界と、自然哲学が関わる自然界とでは、考察レベルに差があるものの、両世界はいわば地続きであって、そこに断絶は見られない。したがって、両世界に関する存在論的考察だけでもとづいて、安んじて自然哲学を形而上学の上に基礎づけることができた。これに対して『就任論文』では、感性界と知性界に関して、感性的原理と知性的原理とが互いに独立に各々の世界を支配しており、両世界は互いにまったく没交渉であり断絶している。だからこそカントは、感性界がニュートン的な重力法則に支配されているという事実とはまったく無関係に、知性界を實在的な相互作用を介して結合する諸実体から成る世界として描いているのである。むしろ、感性的原理の知性的原理に対する影響を阻止することこそが『就任論文』の眼目であった。要するに、近代自然科学の形而上学的基礎づけというテーマから見たとき、『就任論文』の形而上学は、けっしてカントの意に沿うものではなかったのである。この問題の決着は、批判期の著作『原理』によって与えられることになる。

カントは『就任論文』をもって批判哲学への扉を開く地点に達したが、けっしてそこにとどまることはできず、批判哲学の確立に向かって、さらに茨の道を歩むことになる。その意味で『就任論文』は、批判哲学の本丸へと向かうカントの思索の途上における過渡期の姿を鮮明に表した著作であると結論できるであろう。

以上、批判哲学へと向かうカントの哲学的思索の歩みを空間論という観点から追跡す

る試みを行ってきた。空間という概念は自然哲学と形而上学とのインターフェイスに位置する。それゆえに自然哲学と形而上学との関係を自らの哲学的営為の、生涯にわたる重要なテーマとしたカントにとって、空間論がその中心に据えられてきたのは当然であった。したがってまた、ライプニッツ・ヴォルフ流の形而上学の枠組の下で思想形成を図った若きカントが、ライプニッツ的な空間の関係説の土台の上で自然哲学と形而上学との関係を考えようとしたことも当然であった。それゆえに68年の『方位論文』で絶対空間の存在論証を行ったことは、単に幾何学の実在的世界への適用に対して哲学的な根拠を与えたというにとどまらず、それまでにカントが確立していた自然哲学と形而上学との関係を一から考え直さざるをえない状況へとカントを追いやった。『方位論文』がカントの哲学的営為にもたらした衝撃は、きわめて大きかったと思われる。しかし、それは同時にまた、批判哲学へと至る、決定的に重要な一歩でもあったのである。

《注》

カントからの引用は『純粋理性批判』については慣例に従って第一版をA、第二版をBで表記し、それ以外の著作資料についてはアカデミー版カント全集の巻号をローマ数字で表記する。なお訳出にあたっては、岩波書店版『カント全集』を底本としたが、そのつど断ることなく訳文を変更した箇所がある。カント以外の著作の引用については、邦訳がある場合には邦訳者の氏名を表記して著作名に替えた。

- (1) M. Kühn, *Kant. A Biography*, Cambridge UP 2001, 菅沢龍文・中澤武・山根雄一郎(訳)『カント伝』(春風社, 2017年) 372頁。
- (2) I. Polonoff, *Force, Cosmos and Other Themes in Kant's Early Thought*, Bonn 1973.
G. B. Sala, *Kant und die Frage nach Gott*, Walter de Gruyter 1990.
M. Friedman, *Kant and the Exact Sciences*, Harvard UP 1992.
M. Schönfeld, *The Philosophy of the Young Kant*, Oxford UP 2000.
- (3) 高橋昭二『カントの弁証論』(創文社, 1969年)。浜田義文『若きカントの思想形成』(勁草書房, 1967年)。
- (4) 高橋昭二は前掲書において、アンチノミー論こそがカントに対して批判哲学への方向を与えた根本的なテーマであるとする持論を展開している。きわめて興味深く、また啓発される点の多い論考であるが、『批判』の弁証論をすべてアンチノミーの問題として捉え直そうとしている点など、いささか強引な解釈も目につく。
- (5) なお、批判期におけるカントの空間論については、以下のものを参照。犬竹正幸『カントの批判哲学と自然科学』(創文社, 2011年)特に第6章「カントの動力学的空間論」。
- (6) I. Newton, *Philosophiæ Naturalis Principia Mathematica*, 1686, trans. A. Motte, rev. F. Cajori, University of California Press 1946, p. 546. 河辺六男訳『世界の名著 26 ニュートン 自然哲学の数学的諸原理』(中央公論社, 1971年) 564頁。以下、『プリンキピア』からの引用は邦訳による。
- (7) I. Newton, *Optics: or A Treatise of the Reflections, Refractions and Colours of Light*, 1717. 田中一郎訳『科学の名著 6 ニュートン 光学』(朝日出版社, 1981年) 230頁。
- (8) R. Descartes, *Principia Philosophiæ*, 1644, 井上庄七他(訳)『科学の名著第II期 7 デカルト 哲学の原理』(朝日出版社, 1988年) 83頁を参照。ただし、よく知られているよう

- にデカルトは、運動量をベクトル量としてではなくスカラー量として捉えているために、力学的な意味での厳密な運動量保存則をあつかっているとは言えない。
- (9) Vgl. G.W. Leibniz, *Specimen Dynamicum*, 1695, hrsg. von H. G. Dosch, PhB339 1982.
- (10) 米山優・佐々木能章(訳)「ライプニッツとクラークとの往復書簡」『ライプニッツ著作集 9 後期哲学』(工作舎, 1989年) 263-423頁を参照。
- (11) 絶対空間を要請することなしにニュートンの運動の三法則に客観的な意味を与えるために提案された「慣性系」の概念は、19世紀に入ってからのものである。内井惣七『空間の謎。時間の謎』(中央公論新社, 2006年) 97-98頁を参照。
- (12) 犬竹正幸「ライプニッツの自然哲学——『動力学試論』に見られる力と運動」酒井潔他(編)『ライプニッツ読本』(法政大学出版局, 2012年) 92-102頁を参照。
- (13) 山本義隆『古典力学の形成——ニュートンからラグランジュへ』(日本評論社, 1997年) 160頁。
- (14) ニュートンは『光学』第二版の序文中で、「私が重力を物体の本質的属性と考えてはいないことを示すために、その原因に関する疑問の一つ付け加えた」(田中訳, 前掲書, 3頁)と語って、重力が物質の本質に属する規定ではないことを明言している。
- (15) 山本道雄『カントとその時代』(見洋書房, 2008年) 72頁。
- (16) 『批判』のうちでは次のような文言が見られる。「幾何学と哲学とは互いにまったく異なった代物であるが、自然科学のうちでは互いに提携し合っている」(A726/B754)。さらに批判期の著作『原理』は、自然科学における数学と形而上学とのこうした提携の諸相を論じた書であると解することができる。犬竹正幸, 前掲書, 28-51頁を参照。
- (17) 松山壽一「自然モナド論解説」『カント全集 2 前批判期論集 II』(岩波書店, 2000年) 514-520頁。
- (18) この問題についても以下のものを参照。犬竹正幸, 前掲書, 177頁以下。
- (19) 犬竹正幸, 同上書, 102頁以下を参照。
- (20) 河辺訳, 前掲書, 65頁。
- (21) カントは青年期に抱懐したこうした非ニュートンのな力概念を終生、手放すことがなかったものであり、それゆえにニュートン力学の完全な理解に至ることが遂になかった。
- (22) 犬竹正幸, 前掲書, 第五章および第六章を参照。
- (23) カントは本著作で、こうした実在的対立の実例として、外的自然に関する物理学的事象の例だけでなく、内的自然すなわち人間の心に関する心理学的事象も含めて、数多くの実例を挙げている。
- (24) 本著作中でカントは、「哲学者はよく、悪を単なる否定性とみなす」(II 182)と語って、この問題に関する伝統的形而上学の立場について承知していることを仄めかしている。
- (25) カントは実在的対立の実例として、貸金と借金の例を挙げ、本来ならば貸金をプラス、借金をマイナスの符号で表すべきなのに、借金を否定性と見てゼロで表すならば、いくら借金をしても合計はプラスのままになってしまう、といった明白な不合理となる実例をいくつも挙げている (vgl. II 174ff.)。
- (26) この問題については以下の論著が多く示唆を与えてくれる。山本道雄, 前掲書, 第13論文「カントはいつ「デヴィッド・ヒュームの警告」を受けたか」342-359頁。
- (27) N. Huggett (ed.), *Space from Zeno to Einstein*, MIT Press 1999, pp. 203-212.
R. L. Poidevin, *Travels in four Dimensions*, Oxford UP 2003, 植村恒一郎, 島田協子(訳)『時間と空間をめぐる12の謎』(岩波書店, 2012年) 74-87頁。
石黒ひで『ライプニッツの哲学』(岩波書店, 1984年) 136-140頁。
植村恒一郎「位置解析の前に立つカント——『方位論文』の切り拓いたもの」日本カント協会(編)『日本カント研究』No. 18 (知泉書館, 2017年) 105-120頁。

- (28) たとえば以下のものを参照。M. Friedman, *op cit.* p. 28f.
- (29) B. Falkenburg, *Kant's Cosmology*, Springer 2020, p. 86.
- (30) 犬竹正幸, 前掲書, 143-145 頁を参照。
- (31) 石黒ひで, 同上。
- (32) Vgl. E. Görg, *Raum, Gott, Gravitation*, Franz Steiner Verlag 2018, S. 120-138.
- (33) 我が国では石川文康の解釈がこれにあたる。石川文康『カント 第三の思考』(名古屋大学出版会, 1996 年) 18 頁以下を参照。さらに岩波版『カント全集 3 前批判期論集 III』(2001 年) 中の山本道雄解説(408-409 頁)も参照。
- (34) カントは『方位論文』で絶対空間の存在論証の根拠とした不一致対称物の存在を、『就任論文』では空間の根源的直観性の根拠として挙げている(vgl. II 403)。
- (35) なお付言すれば, こうした議論が成り立つ前提として, 以下の点を指摘しておきたい。カントは『就任論文』では, 感性界と知性界の区別を二つの別個の世界として理解しているのではなく, 同一の世界を感性と知性という二つの認識源泉の区別にもとづいて, (高橋昭二の表現を借りるなら)「二元的に」把握している。だからこそカントは, 感性界の存在者である物体について, 「物体は単純実体から成る」という, (『批判』では明確に否定された) 命題が成り立つと考えているのである。高橋昭二, 前掲書, 189 頁を参照。
- (36) さらに, 「覚書」中に見られた「知性の自己欺瞞」(Illusion des Verstandes) という表現と, 『就任論文』中に見られた「知性の自己欺瞞」(praestigiae intellectus) という表現とがまったく同一であることも, こうした解釈を支える有力な傍証として挙げておく。

(原稿受付 2021 年 10 月 7 日)